

『学力の向上に向けて』



八王子市立散田小学校



「児童にゆだねる・児童が選択する」

児童自らが学習課題や学習活動を選択できる授業づくりに向けて

学習の個性化を通して、児童一人ひとりの理解度や興味・関心、学び方の違いに応じて、学習内容・方法・進度などを調整し、学びの質を高めることができると考え、「児童にゆだねる・児童が選択する」授業づくりを研究の重点においた。この研究を通して児童の学びの質を高め、学力の向上に繋がると考えている。

また、アセスメントツール『結-EN』を利用して、児童の実態を把握し、個別の支援の方策を検討したり、学級の状況を踏まえて学習を構成したりし、児童一人ひとりが学びを深めていける手だてを探りながら研究を進めていく。



八王子市立散田小学校

児童にとって学ぶ喜びや居場所があり、小さな希望をつなぎ、可能性を広げる学校をめざし、地域と共に日々「心を育てる」「言葉をつむぐ」「体をつくる」ことを実践しています。

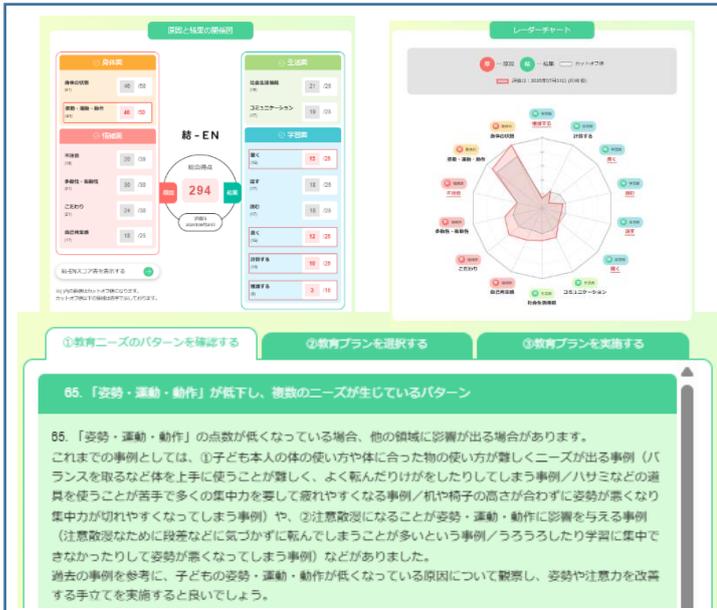
学校ホームページ



研究主題を実現するための取組

「児童にゆだねる・児童が選択する」 学習活動の設定

- ・育みたい力や単元の目標に照らし合わせ、学習単元を通じて児童にゆだねる場面や選択させる場面を意図的に設定する。
- ・児童一人ひとりが自分事として学習に取り組み主体的に学びを進めることができるようにする。



『結-EN』で児童の実態把握と活用

- ・アセスメントツール『結-EN』で、児童の身体面・情緒面・生活面・学習面について教員が82項目を評価する。
- ・分析結果や本ソフトにより提示される教育プランなどを参考にしながら、日頃の児童の指導や支援に活かす。

授業研究・検証授業・授業観察で実践

- ・講師を招いての授業研究（年4回）や校内で協議会を行う検証授業（年3回）、校内研究を意識して各教員が実践し、各種公開授業、研究授業や授業観察など、多くの実践を通して、研究への理解を深めていく。



授業実践（低学年）

○ 学年・教科・単元名・分科会提案のポイント

第1学年 算数科 「おおきくらべ」

初めに決められたもの(手)を使用して、いくつかを確認した後に、他のものでも比較することができるかを考えさせる流れにした。

第2学年以降、ミリメートルやセンチメートルなどの単位が出てくることを踏まえ、1つ分の大きさをそろえるよさを児童が感じられるような授業構成にした。

○ 児童が自ら学習課題や学習活動を選択する場面（研究の手だて）

○テープで長さを測るものを児童が選択できるようにする。

○手を使って縦と横の長さを比べる際に、比べるものを選択できるようにする。

○ 結-ENの結果より

○読み・書きに困難な児童がいることから具体物を用いた操作活動を行う。書字に困難がある場合は数だけを書くなど、書字の負担を減らす。

○活動を選択することに戸惑っている児童には選択肢を提示する。

○ 実践の様子

<学習の流れや指導のポイント>

- 1 前時のふりかえり
- 2 課題提示:机の縦と横を比べる。
- 3 見通し:机の縦と横が、手でいくつか調べる。
- 4 自力解決:机以外のものも比べる。
比べるものを選択する。
- 5 対話的活動(ペアトーク→全体発表)
- 6 適用問題
 - ① 鉛筆とのりの長さをマス目で比べる。
 - ② 青い列車と黄色い列車を車両の数で比べる。
- 7 まとめ
- 8 ふりかえり



○ 実践を通して

<成果と課題>

○成果

・児童に活動を選択させることで、主体的に学ぶ姿が見られた。

○課題

・児童に活動を選択させる場合、本時のねらいからずれないように選択肢を吟味する必要がある。

<授業者から>

・研究内容について

主体的に学習に取り組んだことを、確かな学力に繋げる手だてが必要だと分かった。

・結-ENの活用について

個別に支援が必要な児童への支援方法や、クラス全体の傾向を知ることで全体への手だてを講じることができた。

授業実践(中学年)

○ 学年・教科・単元名・分科会提案のポイント

第4学年 社会科「島の自然を守り生かす八丈島」

第4学年の児童の実態として、考えることや自分の考えを新聞などにまとめることが好きな児童が多く、資料を活用して調べ学習を進められる児童が多い。この単元では、オクリンプラスを使って動画、文章、写真等のさまざまな資料の中から課題に合った内容を選択できるようにすることで、教科書だけでなく幅広い知識を活用できるようにする。また、児童が選んだ資料を項目ごとに振り返りながら自分なりの答えを導き出し、資料活用能力や問題解決力を更に高めたいけるようにしていく。

○ 児童が自ら学習課題や学習活動を選択する場面(研究の手だて)

- 様々な資料を用意し、児童が自分の課題に合った調べ方(資料)を選択できるようにする。
- ペアリングについては、自分の課題に合った調べ方(人数)を選択できるようにする。
- 各テーマから自分の関心に合わせて調べる順番を選択できるようにする。

○ 結-ENの結果から

- 適切な資料を選択することが不十分になることが予想されるので、「見出し」に注目させ、目的に合った資料を選ぶようにする。
- 文章資料の読み取りが不十分になることが予想されるので、モデル学習を行い、児童が「資料にいくつの情報が含まれているか」を考えながら読み取れるようにする。
- まとめを書くことが苦手な児童には、書く内容について具体的に指示をする。

○ 実践の様子

<学習の流れや指導のポイント>

導入で八丈島の産業について興味をもたせ、学習問題に対する予想からどの産業を調べていくのかの計画を立てた。その後、どの産業から調べていくか、誰と調べていくかを児童に選択させ、オクリンプラスに用意したさまざまな形態の資料から、八丈島の産業がどのようにして行われているのかを調べさせた。

授業者が実際に八丈島に取材に行くことで潤沢に資料を準備することができた。資料からメモをとる際には、短くまとめるのではなく、情報を分けて箇条書きにすることを意識させた。



○ 実践を通して

<成果と課題>

- 成果
 - ・ 題意に対する児童の関心が続いた。
 - ・ 調べる事柄を選択できるようにした結果、児童が主体的に取り組むことができた。
- 課題
 - ・ 児童が調べたことを共有する時間があまりとれなかった。

<授業者から>

- ・ 研究内容について
 - 資料を自分で作成する点や、自由進度学習を取り入れる点において、授業準備や授業中の机間指導の見取りを十分に行う必要があることを改めて感じた。
- ・ 結-ENの活用について
 - 学級全体の調査結果から「不注意さ」に課題がある児童が多いことを把握し、資料の読み取り方について丁寧な指導に活かすことができた。

授業実践（高学年）

○ 学年・教科・単元名・分科会提案のポイント

第5学年 理科「ふりこのきまり」

本単元の導入では、2つの異なるふりこを見せることによって、それぞれの違いに着目し、ふりこの周期の違いがなぜ生じるのかを考えられるようにした。そこから、ふりこの周期に影響を与えるものを予想し、実験方法を考えてふりこの周期がなぜ変わるのかを突き止めていく。学習形態の選択、実験方法の設定、単元における自身の目標の設定をすることによって主体的・協働的な学びの実現ができるように設定した。

○ 児童が自ら学習課題や学習活動を選択する場面（研究の手だて）

- 学習形態（グループの人数）を選択できるようにする。
- 課題を自分たちで捉え、実験方法を設定できるようにする。
- 単元を通して目標を選択できるようにする。

○ 結—EN の結果から

- 表計算ソフトを活用し、計算の負担を減らして正しい結果を得られるようにする。
- 考察の要素やポイントを説明したり、文型を掲示したり、個別指導をしたりするなどの支援を継続する。
- コミュニケーション能力の高い児童に対し、学習支援を必要とする児童への働きかけを促すといった、間接的な支援を行う。

○ 実践の様子

<学習の流れや指導のポイント>

前時に児童が立案した計画を教師が実演することで、曖昧な表現や不足していることに気付けるようにした。そこから、「再現性のある計画をめざす」というめあてを明確にして、本時の活動に入っていった。

本時の学習では、前時に作成した、計画を個人→グループで見直すことによって、よりよい計画になるように修正・追記をしていく活動を実施した。

児童にゆだね、個の力を伸ばすために教師からの助言や支援に加え、グループ同士でも声を掛けたり、伝え合ったりする中で前向きに学習に取り組めるよう、促していった。



<授業者から>

・研究内容について

実験計画を児童にゆだねる中で、現段階の力で挑戦する姿を焦らずに見守り、「まだ不十分だ」、「さらによくなりたい」と思えるように働きかけることの重要性を感じた。児童が批判的思考力をもち、よりよい計画に向かって試行錯誤した時間は、今後の計画立案に繋がっていくと考えられる。

・結—EN の活用について

学級全体の調査結果をもとに、「書く」「計算」の領域に対する支援方法を検討したり、「コミュニケーション」「話す」の活動を増やしたりするなど、児童の実態に合わせた単元構成を考えることができた。また、個人の調査結果をもとに、的確な個別支援を行うことができた。

○ 実践を通して

<成果と課題>

○成果

・立案した計画を見直す活動に主体的に関わり、他者との協働したり、気付きを踏まえて粘り強く取り組んだりすることができた。

○課題

・支援が必要な児童に対して、直接的な働きかけだけでなく、児童同士の関わりの中で個の力の向上ができるような声掛けを更に考えていく。

授業実践(めぶき・専科)

○ 学年・教科・単元名・分科会提案のポイント

第1学年 算数「たし算」

本単元では、児童が繰り上がりのある加法の習得課程で10の補数を意識し、10のまとまりをつくり計算ができるようになることをねらいとしている。本単元では、「具体物や半具体物を操作する」や「歌う」、「唱和する」、「書く」などの複数の活動を取り入れ、学習を充実化させる。そこから、自分に合った学習方法を選択し、「学習の個性化」が図れるのではないかと考えた。

○ 児童が自ら学習課題や学習活動を選択する場面(研究の手だて)

- 加法の問題を解く際の「具体物や半具体物を操作する」活動において操作するものを選択できるようにする。
- 自分に合った学習方法を選択し、練習問題に取り組む。

○ 実践の様子

<学習の流れや指導のポイント>

- ①10の補数の歌「ごままん10ラップ」を歌う。
- ②めあてを確認する。
- ③「ごままん10」、「ごままん10システム」、「ブロック」の中から自分に合ったやり方を選択し、ワークシートの問題を解く。
- ④各自ワークシートに取り組む。
- ⑤学習のまとめと振り返りをする。



○ 実践を通して

<成果>

- ・児童が、それぞれの実態に合わせたやり方で量感を育てることができた。
- ・児童の学習意欲を高めることができた。

<課題>

- ・児童にとって最適な学習方法を見つけられるよう、複数のパターンを事前に用意しておくことが必要である。

<授業者から>

複数の学習方法を児童にゆだねるため、事前の授業展開を想像することが難しかった。当日どんな反応があるか、複数のパターンを用意しておく必要があった。また、一人ひとりの児童の学習がどの程度進んでいるかを把握するため、授業中の主な支援はT2に任せるなどの工夫が必要であることが分かった。

研究成果と課題

令和7年度は、4回の研究授業、4回の検証授業を行った。その結果、以下の成果や課題等が挙げられた。

	内容
成果	<ul style="list-style-type: none">・学習に対して児童に判断をゆだねたり、選択の機会を設けたりすることで、主体的に学ぶ姿が多く見られるようになった。・児童の学習内容に対する興味・関心、意欲が高まる姿が見られた。・児童が意欲を継続させながら取り組む姿が見られた。・児童が粘り強く課題に取り組む姿が見られた。・児童が見通しをもって学習に取り組む姿が見られた。・児童が主体的に学習に関わることで、理解を深めている様子がうかがえた。
課題	<ul style="list-style-type: none">・主体的な態度以外の学力の向上につながったかどうかについては、十分に検証できていない。・活動に意欲的である一方、学習内容の理解が不十分な児童も見られた。
今後の手立て	<ul style="list-style-type: none">・本時や単元のねらいから学習活動が逸脱しないようにする。・児童が選択する内容や、教師がゆだねる範囲を慎重に吟味する。・個に応じた声掛けや補助資料の提示など、的確な支援を行う。

まとめ

児童に学習をゆだねたり、児童自身が選択したりする場面を設定することで、主体的に学びに向かう姿が多く見られた。このことから、「ゆだねる・選択させる」指導は、主体的な学びを促す有効な手法であるといえる。

その要因として、児童の実態を的確に把握すること（本実践ではアセスメントツール「結-EN」を活用）、教科特性や単元で身に付けさせたい学力を踏まえた単元デザイン、そして児童一人ひとりに応じた声掛けや教材提示などの支援が挙げられる。

一方で、主体的な態度の育成との学力向上との関連については、今後も検討していく必要がある。

授業や指導等の活用に向けた資料

○児童の実態を把握する。（アセスメントツール『結-EN』を活用してみて）

観点	メリット（良かった点）	デメリット（課題・改善点）
学級理解	<ul style="list-style-type: none"> 学級全体の課題点が明確になった。 クラスの課題を整理して把握できた。 	<ul style="list-style-type: none"> 学級全体の傾向は担任の見たてと大きく変わらず、必要性を感じにくい。
児童理解	<ul style="list-style-type: none"> 一人ひとりの児童の特性や傾向を改めて意識できた。 	<ul style="list-style-type: none"> 児童の傾向を決めつけてしまわないかという不安が残った。
指導の振り返り	<ul style="list-style-type: none"> 感覚的な指導の効果を客観的に確認できた。 これまでの指導が大きく間違っていなかったと確認できた。 	<ul style="list-style-type: none"> 新たな発見につながらないことがあった。
指導・授業改善	<ul style="list-style-type: none"> 指導法の見直しや授業改善を考えるきっかけになった。 	<ul style="list-style-type: none"> 結果をどのように授業改善につなげるのが難しかった。
個別支援	<ul style="list-style-type: none"> 対応が必要な児童への個別支援の視点を得ることができた。 	<ul style="list-style-type: none"> より具体的で個別的な助言が不足していると感じた。
操作・入力	<ul style="list-style-type: none"> 入力を通して児童理解が深まった。 	<ul style="list-style-type: none"> 入力に時間がかかり、負担が大きかった。 質問数が多く大変であった。
実施時期	<ul style="list-style-type: none"> 年度当初に児童理解を深める機会となった。 	<ul style="list-style-type: none"> 1学期の段階では分からないことも多く、回答が難しかった。
成果と労力	<ul style="list-style-type: none"> 指導の方向性を再確認することができた。 	<ul style="list-style-type: none"> 入力時間に対して得られる情報が少ないと感じた。

○授業等で活用する。（児童にゆだねる・児童が選択する学習を考えるポイント）

